

こいずみやくも

小泉八雲著／平川祐弘編集「日本の心」講談社学術文庫、講談社1990年8月10日刊を読む

日本の心

1. 数ある日本独特の美しい事物の中でも最も美しいのは、参拝のため、あるいは休憩のための小高い場所に上って行く途中の道である。それはいわば、何でもない所に通じる道、無に至る階段である。
2. (1) その特別な魅力は、偶然が重なってできる魅力である。
(2) 人間の手によるものと自然の条件——光と形と色——とが調和して生まれる効果であって、雨の日には消失したりする。
(3) だが、変わりやすいものでありながらも、やはり素晴らしいのである。
3. (1) 上への道はまず、両側に巨木の並ぶ^{ゆる}緩やかな坂道で始まるだろう。
(2) 長さおよそ七、八百メートル、石の怪物が一定の間隔に据えられて石畳の参道を守っている。
(3) この並木道が尽きると、今度は幅の広い石段に出る。
(4) その段々は、うっそうとした緑の中を通過して、さらに古い大木の陰になった台地へと通じ、そこからはまた次の台地へと、どこまでも薄暗く上って行く。
(5) それを登って、登って、登りつめると、ついに灰色の鳥居の向こうにめざすゴールが現われる。
(6) がらんとした、白木造りの小さな^{ほこら}祠、神道のお宮である。荘厳な長い道のりを経た末に辿り着く、静まり返った暗い世界、その中心にある驚くべき空虚さ——これこそまさに靈妙そのものである。
4. (1) 同様の経験を仏教に求めることもできる。
(2) おびただしい数の仏閣の中から今はほんの一例として、京都市にある東大谷の寺の^{けいだい}境内を訪ねたとしよう。
(3) 一本の堂々たる並木道が寺の中庭に続き、そこからは、立派な手すりのついた、幅二十五メートルもある、苔むしたどっしりとした石段が、塀をめぐらした台地へと通じている。
(4) それはまるで、デカメロン時代のイタリアの快樂の園にでも続くかと思わせるような光景である。
(5) ところが、台地に着いてみると、そこには門が一つあるだけで、開いたその先は何と墓地になっているのである。
(6) 仏教の庭師は我々に、栄華も権力も美も、ついにはすべてこのような静寂に至るのみだと告げたかったのであろうか。

<コメント>

「日本の心」「日本独特の美しさ」とは何か。ラフカディオ・ハーン、日本名 小泉八雲ほど、その本質をとらえている人はいない。「幸福の青い鳥」は意外と身近に居るものだ。

2019年3月13日(水) 林明夫